

名作再読、拾い読み (22)

『人間喜劇』 ("The human comedy")

小澤 文彦

ウィリアム・サローヤン（サロイヤン）(1908-1981) はアメリカ人小説家、劇作家でカリフォルニアのフレズノ出身です。父親はアルメニア人移民で、アルメニア長老教会牧師でした。サローヤンが2歳の時に父親が亡くなったため、兄弟と一緒にしばらく孤児院に預けられていました。母親の許に戻ってから地元の中学校を12歳で卒業し、電報局で働いていましたが、母親から亡き父の書いた作品を見せられて、作家になる決心をしました。

「ストーリー」誌に発表した短編『ブランコ乗りの勇敢な青年』(1934) で有名になり、その後も多くの短編を発表しています。長編小説は、『わが名はアラム』(1940) と『人間喜劇』(1943) が代表作とみなされています。戯曲としては、『わが心はハイランドにあり』(1939) と『ザ・タイム・オブ・ユア・ライフ』(1939) が挙げられます。後者はブロードウェイで185回も上演されて大成を収め、ピューリッツァー賞に選ばれましたが、「商業主義は芸術を審査すべきでない」という信念から受賞を辞退しました。1950年以降は、短編や戯曲を執筆しながら、自伝をいくつか発表しています。72歳で亡くなり、遺骨は分骨されてカリフォルニアとアルメニアに埋葬されました。

今回は、『人間喜劇』を紹介します。カリフォルニアのイサカという町に住む14歳のホーマーを中心に善意に溢れた人々との交流が描かれた心温まる作品です。

マコーレー一家は父親のマシューが亡くなっており、長男のマーカスは兵隊、長女のベスは大学生なので、次男のホーマーが夜のアルバイトをして家計を支えています。本当は16歳でないと働けないのですが、ホーマーはスパングラー局長の好意により特別に雇ってもらえました。誕生祝いや帰省などを伝えるメッセージの他に、陸軍省からの戦死を伝える電報を配達するという、年少者にとっては荷の重い仕事が始まります。アルバイトを始めて直ぐに、メキシコ人の家に電報を配達することになりました。英語が読めないというサンドバル夫人に文面を読み上げる羽目になり、苦しい思いを堪えて彼女の息子の死を伝えます。

"Mrs. Sandval," Homer said swiftly, "your son is dead. Maybe it's a mistake. Maybe it wasn't your son. Maybe it was somebody else. The telegram says it was Juan Domingo. But maybe the telegram is wrong."

(「サンドバルさん」とホーマーはせきこんで言った。「息子さんは亡くなられたんです。多分間違いですよ。多分あなたの息子さんじゃないかもしれません。多分誰か他の人でしょう。電報にはファン・ドミンゴと書いてあります。でも、多分電報が間違ってるんです。)」

この後、彼女が息子のために作っておいたカクタス・キャンディをホーマーに食べさせる場面は読む人の胸を締め付けます。

彼の弟のユリシーズは未だ4歳で、何にでも好奇心を抱きます。走る列車に向かって乗客に手を振るのですが、誰も反応しません。しかし、無蓋車に乗って、“My old Kentucky home”を歌っていた黒人だけが手を振って応えてくれ“Going home, boy — going back where I belong!”（「故郷へ帰るとこなんだよ、坊や—おれんちに帰るんだ!」）と嬉しそうに叫びます。ユリシーズは幼すぎて故郷へ帰る喜びが未だよく理解できません。無邪気なユリシーズの姿は微笑ましく、誰にでもある幼い頃の思い出を追体験させてくれます。

皆が望んでいなかったマーカスの死を伝える電信が入り、それを受信中に年老いた電信士のグローガンさんは心臓発作を起こして急死します。スパングラー局長は、ホーマーの怒りと悲しみを紛らわせるために一緒に蹄鉄投げをしようと誘います。

この小説からは、戦争のもたらす悲しみと共に、人間の心の温かさが強く感じられます。冒頭のユリシーズに応える黒人から始まり、最後にマーカスの戦友だった孤児のトビーが優しく迎え入れられる場面まで、故郷の有難さや懐かしさを思い起こさせてくれる作品です。

参考文献

1. William Saroyan "The human comedy" (Harcourt, 1971)
2. ウィリアム・サロイヤン著、小島信夫訳『人間喜劇』(晶文社、1977)

おざわ ふみひこ (情報サービス課)